「ちよいと、待つて下さい！」と辭急しく遮つた滿枝の目は、怒りとも恨みとも附かぬ昂奮に燃えて、「成らうと思つて成つたのでは無い！なら仍更ら、意地にも成し遂げようと、言ふかも知れないでは御座いませんか。亡くなつた權三郎は左に右く、近い例が貴方に致しても、御自身で成るお意りで高利貸にお成りなすつたのだから、お舍しになるにもお諦めが附く。けれど、成らうと思はずに成つたものが、今歇めたからと申して、それで成らない昔に復るものでは御座いませんし、諦めやうが無いでは御座いませんか。いえね、此前にも貴方から懇々と御忠告下さいましたから、私、色々と考へて見ましたので御座いますよ。然し今申上げる通り、貴方なぞの御事情と違つて、今更歇めるのは私、自分で悔しう御座います！」

「然ういふお心持も、僕には十分お察し出來るやうに思ふです。然し赤樫さん、人間と云ふものは……殊に變つた境遇に居る者は、自分で自暴と思はず、存外自暴が手傳つてゐるものですよ。變つた境遇が自暴にするのか、自暴から變つた境遇に落ちるのか、其所は分らんので……それが分つて、自分で自暴を無くして見ると、世の中は思つたほど自分と變つたものでは無い、案外公平で、正直で、そして寛大なものです。何うか貴方も、最う一度考へ直して見て下さい。僕も長年貴方には懇意にして頂いた……世間と交際も絶ち、人からは擯斥されて、人並に辭を交してくれるのは、僅に同業者と云ふのも、何うせ高利貸をするほどの人間で、僕も心を許して付合はうとは爲なかつたし、又付合つてもくれなかつた。唯其の中で、長い年月終始變らずに付合つて下すつたのは貴方ばかり、僕のやうなこんな偏人を愛想も盡かさずに、毎も深切にして下すつた……」

「然ぞね、御迷惑樣で！」と滿枝は美しい齒を見せて、皮肉らしく笑つた。

「そりや迷惑な事もありました。」と貫一は飽くまで眞面目で、「然し、御

好意は嬉しくも思つたのです、お志は今でも忘れませんので。切めて其のお志に酬ゐたいと思へばこそ、こんな餘計な事を煩く申上げるのです。今も伺へば、此前僕がお宅へ伺つた時に申上げた事から、貴方も色々考へて下すつた……けれど考へて見れば悔しいから、一層意地になると言ふのでは、一向考へて頂いた効が無い、却てそれでは貴方の意地を募らせたばかりで……其の意地を募らせる！と云ふのが、僕に言はせれば、彌張り自暴かと思ふのですね。赤樫さん、貴方は僕の言ふ事を全ざら耳に入れて下さらん譯でも無い、一度は然うして考へても下すつた。だから最う一度何うか考へ直して見て下さらんか！」

滿枝には今でも決して憎からぬ貫一である。其人の口から自分の身を思つて重ね〳〵眞心籠めて言はれて見ると、有繋に心を動かされずには居られなかつた。美しい瞳を据ゑて、日盛りの花のやうに俛れて聞いた。

「考へ直して……究り私、何うすれば宜しいので？」

「究り、赤樫さんでは無い昔の滿枝さん、宍原滿枝さんにお成りなすつたら可い。」

「何うして成れます？」

「先づ亮一君の阿母さんになつて上げて下さい。」

「それは成れますかも知れません、あの子さへ得心すれば、けれど私の體は……いえ、私の心も、昔の滿枝には成れようが御座いません！」と悔しさうに言つた。

滿枝の其辭には、自分で自分の身が恨めしいと云つた切ない心持が、含まれてゐるやうに貫一には取れた。

「滿枝さん。」と始めて名を呼んだ。而して親しい同情のある目でジッと彼女の顏を見たが、「貴方が赤樫さん以前の滿枝さんであつた其頃の思出を見せませうか。」

「思出？」滿枝は訝しさうに、「と仰しやる……亮一ですか。」

「亮一君もですが……先達てお話し爲ましたね、僕の或る債務者が鎌倉で死なうとした、それを助けたお話を。」

「え、夫婦で心中爲ようとしたとか……」

「其話の主人公です。」

「それが何で私の思出に……」

「いや、お逢ひになれば分ります。些つと待つてゐて下さい、今此所へ寄越しますから。」

貫一は口早やに然う言つて、ッと立つて庭から出て行つた。

「何だらう?」

何か譯有りさうな貫一の其樣子に、滿枝も怪訝と不安とを感じつゝ待つた。

「私、何うして可いのか……」と旋て思餘つたやうに呟いた。

線側の明障子は總硝子になつた、一目に見曠らした相模灣の水は、傾き懸けた夕日を湧かして螢石色に輝いた。而して初島の濃い綠の其所だけ黑曜石の影を溶かした。

物思ふ滿枝の目には其の眺めも映らなかつた。毎もの婀娜やかな顏が鋭く神經的に締つて、美しい目までヒステリックに見えた。膝の傍に煙草入を置いたまゝ、それを吸ふ事も忘れて深く考へ込んだ。

「あゝ……今更ら何うなるものか!」と投出すやうに言つて、始て煙管を取擧げた。

二三服續け樣に吸つて、暴に灰吹を鳴らした。

「貴方……貴方ですか? 宍原のお嬢さん! 宍原の滿、滿、滿枝さん!」

滿枝は愕然として其の聲の主を振返へり見た。

古い麥藁帽子を冠つて、跣足で尻端折りをした若い男が庭口を入つて來た。白い細い脚は、効々しい其の勞働姿に似合はなかつた、帽子を脱ぐと長目に延びた髮が狹い額を仍狹くして、汗ばんだ顏が處女の頰のや

うに紅くなつた。キヨト〳〵した目をして、驚愕と狼狽とに足許も定らなかつた。それは河原紀雄である。

滿枝は振返つたまゝ暫く紀雄の顏を見詰めてゐたが、

「おゝ！」とばかり、色を變へて煙管を落した。

「滿枝さんで御座いましたか！」紀雄はツカ〳〵と縁先まで寄つた。

滿枝も思はず縁側まで乘り出した。

「貴方？紀雄さん！」

「滿枝さん！實に、お久振りで御座いましたねえ。」

滿枝は遠くを見るやうな目をして、半ば上の空で言つた。

「本當に……思ひも寄らない……何年振りでせう？」

「丁度十年振りですよ。」

「私があの時十七……然う、最う十年になりますかねえ！私も變つたが、貴方も年を取りましたね。」

「最う僕も二十八です……貴方は然し、毎もお若い。」

「貴方も二十八にしては矢張りお若いわ。あの時貴方は慥か十九……今でも何所かあの頃の美少年の俤が殘つてゐるわ。」

「冷かしては困ります。」と紀雄は苦笑ひした。

滿枝は十年前の娘時代の追想が雲のやうに湧いた。十七の處女が、始めて男を知つた昔の夢のやうな記憶は、色の褪めた繪繪を見るやうに次〳〵に心に浮んだ。紀雄も思ひは同じであつた。二人は暫く辭も無かつた。

此時丁度、雪野と亮一は溫泉から歸つて來た、何氣無く庭口まで來て偶と中の氣勢に心付いて、雪野は木戸の外に立催つた。亮一が入らうとするのを慌てゝ手眞似で遮つた。中の二人は氣も付かなかつた。

滿枝は偶と我に返つたやうに、

「貴方、立つてゐないで上つたら如何？」

「足が汚れてゐますから……今圃へ水を遣つてゐると、間さんが來て是々だと仰しやるものだから、慌てゝ飛んで來たのです。」

「貴方もそれでは、今始めて私の事をお聞きなすつたの？」

「始めて聞いたのです。赤樫さんと云ふお噂は度び〳〵聞きましたが、唯赤樫さんとだけで、名前はつい聞きませんものでしたから、貴方とは全く氣が付きませんでした。亮一君の事も今一處に聞かされて喫驚したのです。尤もあの子が此方らへ引取られて間もありませんし、それに病氣ではあり、僕も未だ泌々話をした事も無いので、宍原と云ふ苗字も今日まで知らなかつたのです。何れ荒尾さんの親戚か何かで、双親も死んで無いのだらう、可哀さうな孤兒だと唯然う思つてゐました。……あの子が豈か……あゝ、僕は何だか夢のやうな氣がして……」

木戸の外に立催つた雪野は、略ぼ話の意味を察して卵及るばかりに驚いた。躍る胸を制へて、何やら亮一に耳打ちすると、二人は生垣の茂みの蔭にソッと身を忍ばせた。

滿枝も紀雄も唯自分達の事にのみ氣を取られた。紀雄は始めて我子を知つた心の動亂を、見苦しいほど面に出して、何の分別も付かず唯ウロ〳〵した。默つて其樣子を眺めてゐた滿枝は、次第に冷かな顏になつた。

「自分が孕ませた因果の塊りが、現在目の前に大きくなつて育つてゐるのを見たら、貴方も好い心持は爲ないでせうねえ！」と毒のある言ひ方をした。

「僕は、唯意外で……」

「意外で濟みますかよ！」と滿枝は苛立つて「貴方も身に覺えのある事なら、今日迄打遣つて置くと云ふ法は無い……」

「ですが、何うなつたか更ばり分らなかつたものですから……」

「分らないのでは無くて、分らうと爲さらなかつたのです、では貴方は、是まで一度だつて、自分の孕ませた子が何うなつたか、其子の母親は何

うしたか、考へて見た事でもありますか！」

「滿枝さん！　貴方は僕を……そんな薄情な僕だと思ひなさるんですか。」

と紀雄は心外さうに言つた。

「薄情ぢや有りませんか。十六や十七の小娘を、好いやうに玩弄にして、身重にまで爲せて、其れきり何所へか行つてお了ひなすつた……」

「然う取つて下すつては……あの際僕は貴方を貰ひ受けるやうに母に賴んで、貴方の阿父さんに再三話して貰つたのですが、宍原さんは何うしてもお肯入れが無かつたので……其中に僕も田舍へ退込まねば成らない事になつて……」

「それきりなんでせう？　貴方は。」と滿枝の聲は激した、冷かに見せ懸けてゐた顏も、隱されぬ心の苦悶に目の色まで變つて、「私は、ねえ、お聞きなさいよ、あれから私何うなつたと思ひなさる？　頑固な父は何うしても赦してくれません。身重の體が段々目に立てくるに連れて、父の憎しみと腹立は一層募つて、不義の罰だ、不孝の罪だと毎日のやうに責められる愁さ！　始終泣き暮しましたよ。其爲めに血が逆上つて氣が變になつた事もあります。一思ひに死んで了はうとした事も二度や三度では有りません。寧そ腹の子だけでも闇から闇へ、とそんな恐しい事も思つて見ました。然し無事に產んで見ると、男には分らない女親の情愛と云ふものは別で、私最う此の子の爲めに、此のまゝ母親で通さう、親一人子一人で一生送らうとまで決心したのですよ。けれど　父の憎しみは何にも知らない赤坊にまでも懸つて、父無し子だ、不義の塊りだと云ふので、產後の血病ひで私が寢てゐる中に、默つて何所へか遣つて了つたのです。親とは言ひながら餘りだと思つて、父を恨みました！　父を呪ひました！　それから今の赤樫と云ふのへ……それも父の爲めに餘儀無く、手傳ひのやうに遣られたのですが、私、二度と最う父の許へ歸らうとは思ひませんでした。そして若い女の盛りを年寄りの慰みものになつて、女の情も、

母親の情も、自分の一生と共に棄てゝ了つたのです！」

「濟みません！それ程までに苦勞をなすつたとは……それも皆僕からで、濟みません！」と紀雄は顏も擧げ得なかつた。

「濟みませんと言つて濟む事ではありませんが……其代り僕は、切めてのお詫びに亮一を引取つて、此の後何んなにしても父親の義務を……」

「父親の？貴方は、では、あの子に對して親と言へる權利があると思つてお居でゞすか。あの子は私が一人で產んだのですよ！」

「ですが、貴方も今日まで……」とオヅ〳〵言つた。

「今日まで？今日まで何です？」

「手許でお育てなすつたのでも無いのですから……」

「それが貴方の事情と同一になりますか。私はあの子の事が因で、今日まで身を棄てゝゐたのですよ。貴方は何です！聞けば其後も亦私の代りのやうな者を拵へて、鎌倉とかで心中爲ようとしたと云ふでは有りませんか。亮一を引取つて、ぢや其女を彼の母親にするのですか？」

紀雄は眞赤になつて俯いたまゝ、一言も無かつた。滿枝は怒りと蔑みとを目にも口にも見せて、

「間さんは一體、何う爲さらうと云ふのです？」

「何うと云つて……別に未だ意見も聞きませんが……」

「第一又、何ういふ意りで貴方を此所へ寄來したのです？」

「……」

「貴方と私と突合せて、それで何う爲ようと云ふ考へなのか……貴方、間さんを呼んで來て下さい。」

「えゝ……ですが、間さんには別に惡いお考へがあつて……」

「いゝえ、左に右く間さんに、直ぐ來て貰つて下さい！」

紀雄は餘儀無く庭口を出て行つた。其の途方に暮れたやうな意氣地無い後姿を、滿枝は殆ど憎惡に近い目をして見遣つたが、旋て靜に元の座

に戻つて煙草入を取つた。有繋に心は穏かでないらしく、煙管を持つ手が顫へた。

間も無く縁側傳ひに老婢が出て來て、

「赤樫様、何うぞ彼方らへ……丁度時分時で御座いますから、何も御座いませんが御飯を差上げますから……河原様も御一處に、彼方らでお話しも伺ひますから。」と仰しやつて、旦那様が。」

「河原さんも？　然う、有難う。」と滿枝は立つた。

豐に案内されて、縁側傳ひに貫一等の居る方へ行つた。

其二

今まで生垣の蔭に身を密ませてゐた雪野と亮一は、人目の無くなつたのを見て漸う其所を出た。一部始終を聞き知つた雪野は、乾き懸つたタオルも涙に搾つて目は眞赤に腫れ上つた。亮一も聲を殺して泣いてゐた。

「亮ちやん、貴方悉かり聞いたわね。」

亮一は啜り上げて頷いた。

「聞いたら分つたでせう。私さへ居なけりや、亮ちやんも本當の阿父さんや阿母さんと一處になれてよ。だから、私ね、是きり最う此所へは歸つて來ないから、ね、亮ちやんから皆さんに然う言つて下さいよ。」

雪野は深い決心の色を見せながら、亮一を庭口から押入れるやうにして、自分は其のまゝ足早に去らうとした。

「姐さん、可けないよう！」と泣聲を搾つて、亮一は矢庭に縋り着いた。

「僕も連れてつて……」

「連れて行くつて……姐さんは何所へ行くか知れないのよ。」

「何所でも可いの、姐さんの行く所へ僕も行く！」

雪野は思はず抱き寄せて、

「そんな肯分けの無い……亮ちやんは本當の阿父さんや阿母さんが知れ

たのぢや有りませんか。是から阿父さんや阿母さんの傍で可愛がつて貰ふのよ。」

「貰はんの、僕、荒尾の小父さんに謹られるから……」と亮一は思出したやうに歎つて、「阿父さんも阿母さんも、僕の事で諍つてるんだし、僕何方へも可愛がつて貰へないの。」

「まあ！ 可哀さうに、阿父さんと阿母さんの今の話が分つて？ 年の行かないのにあんな悲しい話を聞いて……然ぞねえ。本當に亮ちやんも不仕合せだわねえ！」と抱き締めて泣いた。

「だから、姐さんの行く所へ僕も連れてつて。」

「だつて、姐さんの行く所は、遠い〳〵所なのよ。行つたら最う歸つて來られない所よ。」

「可いの、僕も歸らないの。」

雪野は其の思詰めた顔を怜らしげに見入つたが、驅して嗤すより爲よ

うが無いと思つて、

「ではね、歸らないなんて事は嘘。そんな事は嘘だから、姐さん直き歸つて來るの、明日の朝になれば……多分何所かへ……然う、明日になればぢ屹度又亮ちやんにも逢へてよ。だから、今夜は此のまゝ大人しく待つて居らつしやい、ね。」

「厭だ！ 姐さん、僕措いて行つちや。」

「だつて、今夜一晩……」

「うゝん、今夜の中に、姐さん死ぬんだ！ 屹度然うだ……」

「あら！」雪野は慌てゝ其口を抑へるやうにした。

「然うだねえ、姐さん。」と亮一は聲を密めて聞いた。

雪野はタヲルを嚙んで咽び入つた。答へも出來なかつた。

「姐さん、僕も死にたい！ 一處に連れてつて……」

「まあ！ 亮ちやんが？ 何故？」と呆れた。

「僕、體が大變惡いの、逢ひたいと思つてた阿父さんと阿母さんはあんなだし、僕最う死んだ方が可い。今夜荒尾の小父さんが來ると……小父さんの來ない中に死にたいの！」

「私も、荒尾さんの來ない中に死にたいの！」

二人は抱き合つて泣いた。

夕暮の色は何時か最う沖を籠めて、初島の影も暗くなつた。家の内には最う電氣が來た。老婢が座敷の電燈を拈りに來ると、木戸の外の雪野は其の氣勢に驚いて、見尤められぬ中に、亮一の手を引いてアタフタ裏門の方へ行つた。

「坊ちやんも雪野さんも、最う夕飯だと云ふのに何うしたんだらう！何ぼ若い人の湯だからつて、長いにも方途があつたものだ。」と豐は何にも知らずに然う思つた。

電氣が點いて部屋の内が明るくなると、急に外が暗くなつたやうであつた。海は唯仄白い水の色と、微な波の光りとに暮れた。

奥の間には夕飯の膳が出て、貫一と滿枝と紀雄と三人の間に、亮一の處置に就いて交る〳〵議せられた。然し何うするにしても、當人の健康が恢復するまでは今のまゝ貫一の所に置くより外は無かつた。而して肝心な荒尾の意見も聞かねば成らなかつた。

食事が濟むと、滿枝は貫一に附いて元の座敷へ歸つた。紀雄は茶を淹れて持つて來た。

「では、亮一を迎ひに行つて來ませうか。」と紀雄は茶を注ぎながら貫一に聞いた。

「あゝ然うして下さい。」と貫一は使つてゐた爪楊子を捨てゝ、「雪野さんも附いてゐながら、何時までも何うしたのだらう？今頃まで吸氣館に居る筈は無いが、左に右く覗いて見て……」

「承知しました。屹度何に、毎もの貸本屋へ入り込んでゐるのですよ。

ちや、行つて來ます。」

紀雄の退込んだ後で、

「今晩七時で御座いますね？　荒尾さんの見えますのは。」と滿枝は小形の金時計を出して見た。

「七時過ぎ……まあ八時近くなるでせうよ！　左に右く今日着くと云ふ手紙が來てゐるのですから、何う決するにしても、一應荒尾君の意見も聞かなければ……今もお話しする通り、亮坊の一身上に就いては、亡くなられた貴方の御親父さんから、名古屋で一切荒尾君が托されてゐるのですからね。」

「然やうで御座いますとも！　亮一と云ひ父と云ひ、不思議な御緣で荒尾さんには御恩になりまして……然うとは知らずに僅な債權で長らくあの方をお苦しめ申して、私、今更申譯が御座いませんですよ。」

「それも商賣なら爲方が無いでせう。」

「今晩お目に懸つたら、何うして私、お詫びを爲たものか……」と有繋の滿枝も悄げた。

貫一は膝を進めて、

「それには彌張り今の商賣を歇めて見せるのが、一番あの男も喜ぶでせう。何時か荒尾君が、貴方にも御忠告したさうですね？」

「えゝ、戸塚のお宅で、貴方が來らしつたあの時ですわ。あの時も私、御忠告は素直に伺つてゐたのですが、後で妙な勘違ひから失禮を申上げたものですから、荒尾さんも大層御立腹遊ばして……」

「刀を扱いたあの時ですね。」

「お拔きなさるのも御無理は御座いませんわ。私、言過ぎましたのですもの。」と滿枝は殊勝らしく言つて、「あれから、何とか貴方にお話が御座いましたか。」

「貴方の噂は始終出ます。荒尾君も高利貸としての貴方には反感も抱い

てゐるでせうが、貴方其のものには感心してゐます……いや、全く！　貴方ほどの才女を……才色備つた婦人を高利貸如きで置くのは惜しいと。そりや誰でも然う思ふですよ。それに今度又何十萬といふ遺産は相續なさるし、所謂虎に翼……」

「鬼に金棒ですか……女鬼だなんて仰しやつては厭ですよ。」

「女鬼でも宜しい、佛魔一紙とかで、貴方が其れだけの武器を以て他の有益な方面に活動なすつたら、屹度そりや目覺しい成功もなさるに違無い。社會からクインともプリンセスとも仰がれる資格を十分に持つてお居でなのだ。荒尾君も今度は滿洲から南蒙古、北蒙古と云ふ大舞臺へ乘出して、日本、支那、露西亞の三大國の大芝居を書かうと云ふのです。何うです？　貴方も一づ荒尾君の女房役を勤めて見たら。蒙古の王族とか、支那の大官とか、乃至は露西亞の軍人と云つたやうな千兩役者を對手に、貴方の其の武器と技倆を縱横に揮つて見る氣はありませんか。貧乏な債務者を對手に、差押へだの訴訟だのより芝居が派出で大きい。亮一君は何うせあの體で、設ひ貴方が引取るにしてからが、最う少し健康が恢復するまでは彌張り此所に置いた方が好い。僕が大切にお預りするから、貴方は一つ奮發を爲さい。貴方なら荒尾君も喜んで同行爲ようし、同行しても心强いでせう。」

滿枝はジッと熱心に聞いた。

「荒尾さんの女房役なら、屹度そりや面白いでせうが……」と美しい目を輝しましたが、「一つまあ考へさせて下さい、私には大事件ですから……」

「然うですとも！　能く一つ考へて、今度荒尾君が來たら、貴方もお會ひなさい。」

「は。」と考へ深い目附きをした。

「大變です！　大變です！」不意に紀雄が庭口から駈け込んで來て、「間さん、大變な事が……雪野さんと亮坊が身投げをしました！」

貫一も滿枝も、飛上るばかり驚いた。

「え！　身投げ？」

「身投げですつて？」

「吸氣館へ行つて聞きますと、二人とも明い中に歸つたと云ふ事ですから、毎もの貸本屋や方々心當りを聞いて歩いたのですが、何所でも分らず……それから海岸の方を捜してゐると、丁度此人が舟から上つて、かういふ家は何所だつて聞くから、見ると雪野さんの手で、貴方と私に宛てた遺書で……」と紀雄は慌てゝ袂や懷を探つた。

紀雄の背後には、一人の漁師が附いて來た。

「私、初島の者だがね、晩方漁を了つて沖から歸り懸けると、途中に傳馬が一艘流れてるでねえかね。人も乘つて居ねえだし、何所の舟だか知んねえが、曳いて行つて持主に渡してやんべいと思つて、小縁に手え懸けて見ると、錨が下してあるだ。變だぞ！　思つて舟の中を見ると、女子の下駄と小兒の草履と、それから手紙が一本、石鹽壺が押へにして置いてあるでねえか。こりや的きり、はあ、身投げだと思つて、其所らを捜して見るには見たゞが、何せい道具が無えものだかんね、私一人の力にや了へねえだ。何でも、はあ、身寄へ早く知らせた方が可かつべいと思つてね、大急ぎで手紙だけ持つて來たゞよ。晩方の退汐は甚ら流れが早かつたゞかんね、舟え獨りでに沖へ持つて行かれたゞ。」

「有りました！　是……是です、其の手紙が。」

紀雄は漸と懷から探し出した手紙を貫一は引手繰るやうに攫んだまゝ、庭下駄を引懸けた。

「早く！　河原君、君は早く其人の舟で……後から直ぐ二三艘出させるから……」

漁師を先きに、紀雄も貫一も急いで庭口を出て、海岸の方へ駈けて行つた。滿枝も獨りジッと爲てはゐられなくて、後から續いた。意外とも

珍事とも、人々は夢に夢見る心地で走つた。

老婢の豐もそれを聞き知つて、氣の遠くなるほど仰天した。病人の宮を一人殘して出る譯にも行かず、立つても居てもゐられぬ心持で家の中をウロ〳〵した。座敷の縁側の見曠らしへ出て、二人が乘り棄てた舟の其のあたりを見遣つたが、生憎月の無い海は眞暗であつた。微な星明りに水の光が仄白く見えるのみで、初島と思はれるあたりが闇の中に濃く際立つて黑い。分るのは唯それくらゐであつた。

「お二人とも先きの長いお體だのに……何うか助かりますやうに……手後れにならないやうに……南無金比羅大權現！」と縁側へ跪いて祈念した。

間も無く、貫一と滿枝と庭口から歸つて來た。

「あの、何うで御座います？　助かりますか。」と豐は轉がるやうに縁側を降りた。

「今舟が出て行つたから……」と貫一は辭寡に言つて、ツカ〳〵と見曠らしの方へ行つた。

滿枝も一處に沖を見入つた。

眞暗な海の向う、丁度初島の先きあたりと思ふ見當に、點々と裸火の光が見え出した。

「ねえ、手後れになるやうな事は御座いませんでせうか。」と豐は心も心ならぬやうであつた。

「何にしても死骸が見付からん事には……」と貫一は海の方に氣を取られた。

「見付かりませうか。流されて了ひは爲ないでせうか。」と滿枝が言つた。

「潮が涸りだから、遠くへは持つて行かないだらうと漁師達は言ふのですが……」

「あ、明りを振ります！」と豐が叫んだ。

「おゝ、見付かつた合圖だ！」

沖の火は一つだけ尾を引いて左右へ振られた。

「何ちらでせう？　一人だけ見付かつたのですね。」と滿枝は一心に火光を見詰めた。

「彌張り凹りだから流されなかつたのです。最う一つだ！」

續いて又別の火が振られた。而して先きの火と共に二つの光が、高く低く左右に相動いた。

「見付かつた！　見付かつた！　二人とも見付かつた！」貫一は狂喜して叫んだ。

「まあ、可かつた。」と滿枝も胸を撫でた。

「あゝ有難い、南無金比羅大權現……」と豐は嬉しさに地平に坐つて了つた。

「いや、未だ未だ……二人とも助かるか助からないか、直ぐ醫者の所へ擔ぎ込ませるやうに……」と貫一は急いで又庭口を出ようとして、滿枝に、

「雪野さんの遺書……亮坊の言つた事も書いてあるから御覽なさい。」と其れを渡して行つた。

滿枝は遺書を受取つたまゝ、一人仍沖を見詰めた。今まで入り亂れて動いてゐた火光は、急に三つ消え、二つ消え、段々數が減じて行つた。

「おや、明りが……何う爲たんだらう？」

「何うかしましたか。」と豐も顏を擧げた。

「段々消えて滅つて行くが……」

「あれは……いゝえ、舟が島の蔭へ入つて、それで見えなくなつたので御座いますよ　最う皆歸り懸けたので御座います。」

「あゝそれぢや、彼所が丁度初島なのですね。」と滿枝も頷いて、「それは然うと、今に此所へ二人を運んで來るだらうが、座敷の電氣だけでは暗いわね。」

「然やうで御座いますね、ランプを持つて參りませうか。」

「ランプぢや風に保たないから……それに二人の體を暖めなければ成らないかも知れないから、焚火を用意したら可いでせう。」

「では、然う致しませう。」

「豐は早速裏へ廻つて、燃物を一抱へ持つて來た。而して庭の眞中へ其れを燃やし付けた。眞暗な宵闇の空に、赤い炎と黑　煙とが凄慘な影を色取つた。海から來る潮風に火花がバチ〳〵飛んだ。

滿枝は貫一から渡された雪野の遺書を焚火の傍で披げて讀んだ。

「では……是で見ると、私の言つた事を聞いてゐて、それで死ぬ氣になつた……」と始めて知つて見ると、自分が死なさせたも同じやうに彼女の心は亂れた。

旋て貫一が先きに立つて、ドヤ〳〵と多勢の足音がした。滿枝も豐も木戸の傍まで駈け寄つた。

「駄目です！」と言つて、貫一はガッカリしたやうに首を掉つた。

「え、何う駄目？」滿枝の聲は突走つた。

「助かりませんか、お二人とも！」と豐は最う泣聲であつた。

二人の漁師が、戸板に載せた亮一の骸を焚火の傍へ舁き据ゑた。滿枝も豐も飛び着くやうに寄つて見た。

「亮一！」

「坊ちやん！」

「後のを。」と貫一は漁師達を行かせて、

「可なり時が經ちましたからねえ、手後れでした！雪野さんの方は大人だけに、何うかと思つて醫者が今手當てをしてゐるが……彌張り駄目らしいやうです！」

「亮一！亮一！勘……勘忍しておくれ！」と有繋の滿枝も人目を忘れて、熱い涙を我子の死顔に注いで搔口説いた。「こんな事と知つたら、早く戸塚の時に、親子と知らせてやるだつたのに……虫が知らせたか、あの頃

から妙に懷いて……あゝ生れ落ちると人手に渡つて、戀しい〳〵と思ひ續けた親子が、十年振りで遭逢はうと云ふのに……亮一、お前も氣强い・何故……何故死んでおくれだ！」

「能く〳〵……親子の御緣がお薄いので御座いますねえ！」と豐は顏を掩つて了つた。

貫一も顏を背向けて涙を呑んだ。

次いで雪野の骸も來た。戸板に附添つて歸つた紀雄は、顏の血の氣も失せて、汐繁吹に濡れた體がガタ〳〵顫へた。

「駄目？雪野さんも。」と貫一が聞いた。

「彌張り手後れで……」と紀雄は自分の髮毛を拷つた。

「彌張りね……あゝ、お可哀さうに！」と豐は更に其の骸へ寄つて、「雪野さん！雪野さん！」と呼び〳〵泣いた。

漁師達は焚火の傍に二人の骸を置き並べて、無言のまゝ立去つた。紀雄は其所に踞つたまゝ、二人の死顏に掩冠さるやうに近々と顏を寄せて、

「雪野さん、赦して下さい！亮坊、お前にも濟まない！二人とも僕が殺したやうなものだ。僕は……僕は……一處に死にたい！」と身悶えした。

此の騷ぎの中へ、豫て通知のあつた荒尾と大館老人と、來合せたのであつた。

印燈を持つた一人の車夫が、庭口へ來て、

「もし、お客樣です。玄關で幾ら呼んでも御返事が無いので……」

然う言ふ後から、背廣に鳥打帽の荒尾と、羽織袴にインバネスを端被つた大館老人とは、最う庭へ入つて來た。

「おゝ、荒尾君、今着いたのかね」と貫一が先づ迎へて言つた。

「今途中で聞いたのぢやが、何か變事が？」と荒尾が直ぐ二つの死骸に目を遣つた。

「あれだ、雪野さんと亮坊が……」

「むゝ、漁師達の口振りが何うも然うらしいと思うて、途々大館さんとも心配して來たのぢや……先生！」と老人を顧みた。

「然やうか！」と言ふと、老人はッカッカと死骸の傍に寄つた。

荒尾もッと寄つて見た。

「赤樫さん　嚢の遺書を。」と貫一は其れを受取つて、荒尾に、「是が雪野さんの遺書だが、君見て、大館さんにも。」

荒尾は受取つて焚火の明りに讀んだ。而して老人に渡した。老人も一わたり目を通すと言つた。

「自業自得ぢや！　然し、子どもは可哀さうな事をしたのう！」

沈痛な老人の聲は微に顫へた。而して目には滴が光つた。それは強ち亮一の死を傷むのみの涙では無かつた。

「河原君……赤樫さんもお居でぢやね。」と荒尾はキと二人を見遣つて、

「貴方達は、此責任を何う解決するか！」

「私は……死んで……死んでお詫びを爲ます！」と紀雄は物狂はしげに言つた。

「死ぬ？　死ぬも可からう。」と荒尾は冷かな調子で、「君に、其の勇氣と決心があるかな？」

「死にます！　鎌倉で最う無かつた命ですから……私も雪野さんの後を逐ひます。」

「血迷うちや可かん！」と大館老人が叱するやうに言つた、「君には、一人きりの老母が國で待つて居る。私は自分の娘を失うた……親の心持に變りは無い。娘の代りに君を連れて歸つて、君のお母さんに手渡しする、な、宜しいか。死んだ雪野へ切めてものそれが功德ぢや！」

一同は老人の顏を仰ぎ見る事が出來なかつた。紀雄は地平へ平伏して唯泣いた。

「赤樫さん、貴方は？」と老人は聞いた。

「私、死ぬにも死なれません！　死んでやつても、同じ佛になるのは、あの子も雪野さんも不承知でせう。我子にまでも愛想を盡かされた私……死ぬにも死なれません！」と滿枝は終に面を掩つて泣いた。

「其處へ氣が付いたら、貴方も眞人間にお成りなさい。それが亮一への何よりの功德ぢや！」と荒尾は言つた。

「成ります！　今日限り……亮一の母親であつた昔の滿枝に復ります！」

「そして滿洲へ、ね。荒尾君にお賴みなさい。」と貫一は傍から勸めた。

「お賴み爲ます！　何所へでも……何んな事でも、死んだ意りで私……荒尾さん、何うぞ滿枝をお役に立てゝ下さい！」

荒尾は會心の笑みを洩らして頷いた。

「月が出る！　闇が明るくなつた！」

思寄らない聲に、一同は始めて氣が付いて見ると、何時の間にか宮が座敷の緣側に立つてゐるのであつた。彼女は獨り海の方を見詰めて立つた。

「月の怨みが晴れた、涙の曇りが晴れた。嬉しい！　是から良い月夜になるわ。」

眞暗な水平線が、ポッと赤味を潮して來た。

其　二

翌日雪野と亮一の死骸は、土地の火葬場に送られた。大館老人は折角此所まで來た事でもあるから、滿洲へ出發する荒尾を見送つて置いて歸國する事にした。而して雪野と亮一との骨を紀雄に持たせて、一人先づ岐阜へ歸らせた。滿枝が滿洲から歸るまで、亮一の位牌は彼が預かる事になつたのである。

滿枝は愈よ荒尾に附いて滿洲行きと決まると、赤樫の遺產と債權の全部とを貫一の處理に一任した。而して荒尾と滿枝とが縱橫の飛躍を滿洲

に試みるに就いて其の兵站部を貫一が引受ける事になつた。貫一は自分の財産と赤樫の遺産とを擧げて、彼等二人が活動の資力を長く豐富に供給し得られる策を講じた。

松崎關東都督、森民政長官、蒲田外務部長等の一行は、既に先月末任地へ赴いた。出發前森夫妻は、改めて憲作の一身上に就いて荒尾に懇請する處があつた。

荒尾と滿枝と、而して憲作の三人一行は、神戸から大連行きの汽船に乘込む事になつた。大館老人と貫一とは神戸まで見送つた。

神戸は諏訪山の旅館に一行は一先づ休息した。而して發船の時間を待つ間、此所で最後の別盃が擧げられた。

「ねえ荒尾君、僕も一處に行けたら、と沁々然う思ふよ。」貫一は盃の雫を切つて荒尾に献しながらかう言つた。

「一處に？」荒尾は盃を受けて、じつと其顏を見遣りながら「何を言ふんだ。君は僕などのやうな身一つと違うて、今は宮さんと云ふものゝ、言はゞ人一人の生命を預かつて居る體では無いか。くれぐれも言うて置くが、宮さんの一生を保護してやるのは君の義務ぢやぞ。世中には宮さん以外に幾多の宮さんがある、が、それ等の女が悉く宮さんの樣に發狂するかと言ふに、決して然うではあるまい。獨り宮さんに限つてあゝなつたと云ふものは、君に對する熱情の如何に切實であるかを證據立てゝ居るのぢや。思迫つて死ぬ女は能う有る、希しうは無い。自殺は自暴でも出來る、一時の出來心……一思ひぢや、死ねばそれきり苦痛から逃れ得る譯ぢやでな。死にもせず、活きもせず、永久に君を思うて、永久に己れを罰する宮さんのやうなのは、こりや最も悲慘で、最も同情せんければ成らん。間、君は今日の心を以て何時までも彼女に接してやらねば濟まんぞ、可いか。そりや君も未だ若い、此の先き永い一生を、敢て僕も一婦女の看護人で以て終れとは言はん。けれど、是だけは僕に誓うてくれ、

君が今後如何なる道を取らうとも、己れの意志にのみ聞かず、情にも聞いてくれ、な、情に於て忍びんやうな態度を忘れても取つてくれるな。君は今日まで餘りに情に背いた。今後はより多く情に殉ずる覺悟が必要なのぢや。」

「有難う！ 君の警告は必ず服膺するから安心してくれ給へ。僕も何に彼の恢復を唯一の希望として活きる意りだから、設ひ何ういふ變化が僕にあつても、彼の一身の保護だけは誓つて變化させない、今後若し僕が何等か動く事があるとしても、それは彼の保護といふ事に故障の無いと云ふ事を、先決にして動けば動くのだ、が、まあそんな事も恐らくあるまいよ。僕も餘りに動き過ぎた、唯最う鎮靜したい、平和が願ひだ！」

「平和？ 然うですぢや、平和ほど尊いものは無い」と大館老人は自分の事のやうに頷いて、「人間、平和は得難いものですぢや。私は此年になつて始めて得る事が出來たのぢやが、得るまでには高い犠牲を拂うて……近くは娘も殺いた、貴方なぞはそれに比べて犠牲が少ない方ぢや。御家内の病氣も、何うやら恢復の見込みがあるやうぢやし……何うか御夫婦とも平和に幸福に送つて下さい。」

「私もそれを祈りますわ。」と滿枝も言つた。「そして早く何うか、あの方を御恢復お爲せ申して上げて下さい。本當にお憐しう御座いますわ。」

「有難う。貴方達が成功して愛でたく滿洲からお歸りなさる時には、何うか宮と二人でお出迎ひ爲たいものです。」と貫一も快濶に答へて、更に憲作に、「森さん、貴方も……僕が言ふまでも無いが、何うか御兩親のお心持や、荒尾君の志を體して、是非一つ滿洲で立派な青年に鍛え直して來て下さい。貴方なぞは年も若いし、身分はあるし、自身で奮發さへ爲されば何んな成功でも爲ます。」

「は。今度は僕も心を入れ易へます。荒尾先生の御指導で、屹度生れ變つた青年になつて歸ります！」と憲作も誓ふやうに言つた。

彼は自分から荒尾の從者を以て任じてゐる。神戸まで來る間にも、殆ど恩師にでも對するやうに心を傾けて荒尾に仕へた。今までの生意氣な、而して無作法な青年とは既に最う生れ變つたやうに見えた。

荒尾も大館も飲ける口だけに、盃は手から手へと盛んに廻つた。貫一さへ毎に無く飲んだ。只憲作だけは固く辭して受けなかつた。彼は詰襟の洋服に烏打帽といふ身輕な服裝をして、手荷物の積込みや船室の整理に、一人先づ波止場へ出掛けて行つた。

荒尾も最う許曲流の褞袍では無かつた。薄鼠の縞羅紗のスプリング仕立の脊廣が、肩幅の廣い丈高い體をガッシリ見せて、長い頰髯も嚴めしく、三揃ひのチョッキの衣兜には太い金鎖も覗いた。正客の荒尾と並んで滿枝は、オリーブの縞絹の半袖のジャケットに、絹レースの長手袋をして、スカートは上衣の色の稍薄い無地であつた。肉附きの豐な體に洋裝が能く似合つて、色も白く、是で髮さへ漆のやうでなかつたら日本婦人とは思はれぬくらゐであつた。

大館は二人の並んだ姿を熟々眺めて言つた。

「荒尾君は曩、僕なぞは身一つぢやと言うたが……何うぢやね、君も此際身一つで無くなつたら?」

附かぬ辭に、一座は思はず其顏を見遣つた。

「こりや昨日も間君と內々話した事ぢやが、荒尾君と滿枝さん、君達寧そ結婚して出掛けたら何んなものかな? 男同士と違うて、男と女とでは、お互ひに要らん遠慮も爲んけりや成らないし、今後の活動上、協心同力と云ふ點に必ず遺憾があらうと思はるゝのぢや。何うせ意氣相容したものなら、女房役なぞと言うて居らんで、純然たる女房……公然二人が結婚したら何うぢやね?」

「僕もそれは大賛成なのさ!」と貫一も乘地になつて、「荒尾君も滿枝さんの才能は元々認めてゐるのだし、滿枝さんも亦荒尾君の人物には推服し

てゐるのだから其點は知己同士なのだ。そこで今一歩容し合つて、愛でたく結婚したら何うだらう。」

「はゝゝゝ。」と荒尾は高笑ひをして、「然ういふ愛でたい話は成功して歸つてからぢや。生死を賭すると言ふも大袈裟ぢやが、左に右く危地にも踏み入らんけりゃ成らん大事の任務を前に控へて、暢氣らしく結婚でもあるまい。」

「いゝや、決して暢氣な問題ぢや無い。」と大館は抑へて、「成功して歸つてからと君は言ふが、私が結婚を勸めるのは、其の成功に遺憾無からしむる一手段でもあるのぢや。それや本式の事は歸つてからでも可いとして、爰で假盃だけでも結んだら何うぢや。私は最う生ひ先きの短い體ぢやで、君等の歸つて來るまで活きちや居らんも知れん。何うぢやね、滿枝さんは？　私に今媒妁を爲せて下さらんか。」

「は、有難う御座いますが……」と有難の滿枝も答へに困ちた。

憲作が波止場から引返して來た時、丁度大館老人の聲で、

「月のかつらの光り添ふ、枝を連ねて諸共に、朝夕なるゝ玉の井の、深き契りは頼もしや……」と玉の井の一節を謠ふのが聞えた。

「最うボツ〳〵乘り込んでも可いさうです。」と憲作が其所へ顏を出した。

「おゝ森君、愛でたいのぢや！　君も一つ此盃を受けて出發し給へ。」と大館は上機嫌で、「朝夕なるゝ玉の井の深き契りは頼もしや〳〵。」と繰返した。

荒尾讓介 完

明治四十五年六月十三日印刷
明治四十五年六月十六日發行
明治四十五年六月廿八日再版
明治四十五年七月廿三日四版
大正元年八月廿六日五版
大正元年十二月廿八日六版
大正二年三月十八日七版

（定價金壹圓）

不許複製

著作者　小栗風葉
東京市麴町區飯田町三丁目廿五番地

發行者　佐藤義亮
東京市麴町區有樂町二丁目一番地

印刷者　中村政雄
東京市麴町區有樂町二丁目一番地

印刷所　報文社

發行所　新潮社
東京市麴町區飯田町三丁目廿五番地
電話【番町】二、二三三番
振替【東京】一、七四二番

▼『荒尾讓介』の讀者にとりて最も興味多かるべき書也！

金色夜叉 終編

紅葉上人最美型本
全製集
定價金壹圓
小包料八錢

小栗風葉氏新著

▼明治文壇稀有の名著として後代に傳はるべきもの也！

▲時事新報評　故尾崎紅葉の大著『金色夜叉』が、作者早世の爲めに遂に完結を告ぐるに至らず。永く未完の著として遺されしは、吾人共に遺憾とするところなりしが、作者の高弟小栗風葉氏、深くこれを遺憾とし、如何にもして完結せしめんとするの志あり。爾來、專ら故人の腹案覺書によりて稿をつぎ、苦心慘澹の末、稿漸く成り、これを『金色夜叉終編』と名づけて今回世に問へり、最もよく故人の特色を體得せる風葉氏によりてエンドを署せられたるは、適人適所を得たるものと云ふ可く、延いて又明治文壇に一光彩を添ふるものと云ふべし。故人の『金色夜叉』と併せて、永く後代に遺すべき名著として洽く之を文壇に薦む。

◉賣切又賣切無前の歡迎を得て第十九版發賣の盛況に達す◉

▲萬朝報評　文章字句共に能く故人の筆致に擬し、其圓熟と洗練とは殆んど故人の壘を壓するの概あり。著者の苦心と困難とは蓋し甚だ大なりしならん、大體の脚色は故人の腹案覺書によりたりと謂へば、素より之を離ぜん樣なく、描寫の精緻にして輕妙なる亦大體に故人の作を讀むの感あり、各種人物の性格に於ては前後能く照應し、殆んど別人の作と思ふべからず。貫一の漸く改悛せんとするに方つて人情の芳醇に醉ふて覺醒の域に突進し、更に身邊の寂寥に愛の光明を發見するの邊り、其描寫極めて自然にして巧妙なるを覺ゆ。蓋し此著の洛陽の紙價をして高からしむべきは、また疑ふべくもあらず。

▼早稲田文學は文壇稀有の傑作也として推讃の辭を贈れり
▼讀賣新聞は近來無比の良著なりと認め其批評を募集せり

黴

忽ち六版

▼島崎藤村氏曰く　作者は自分の氣質に最も近い作を作り得た點に於て確に成功して居る。殊に女性の描寫に於ては成功して居る。この位ゐ巧みに描いたものは此頃の作物には外に例がない。普通人の生活の苦しみが遺憾なく書いてある所に此作の價値がある。
▲正宗白鳥氏曰く　女をこの位ゐ巧みに描いたものは此頃の作物には外に例がない。
▼眞山青果氏曰く　世間が此作を目して、氏の過去の仕事中最も傑れて且つ充實した內容を持つてゐると云ふ批評には無論同意である。
▲島村抱月氏曰く　小說壇の第一位を占む可きものである。あのじみな作風で新しい道を辿つて來て一の頂點に達したのではないかと云ふ意味で注目すべき作である。

德田秋聲氏苦心の二名著

總クロース製　定價各五拾五錢
特製最美本　郵稅各金六錢

足迹

▲『黴』の姉妹篇
▲第二版出來

田山花袋氏曰く

私は秋聲氏の作で、これほど興味を持つて讀んだものはこれまでになかつた程だ。『足迹』は『黴』の女の部分だけ殘して書いたやうなものである。お銀の前身お庄といふ女の東京に來てからの生立を印象的に書いたもので、そのかよわい女のかげに廣いライフが無限に展開されてゐるさまが、いかにも人をして物を思はしめずには置かない。第一に全篇を透した線が單純でそして混亂してゐないのがこの一篇をして纒つた感じを與へせしめる大きな原因である。そしてこの單純な線を飾るのに複雜な豐富な肉を以てしてゐる。そしてお庄といふ一人の女のライフは、渾然として廣いライフの中に浮出して見える。他人をこれだけに細かく書いたといふことゝ、複雜した事件を印象的に運んで行つたことゝ、物語風にならないやうに描いて行つたことゝ、さうしたことに私は非常に興味を覺えた。客觀の藝術——いかやうにも人生の泉を汲出すことの出來るやうな客觀の藝術を私は『足迹』に見た。

■全國三十有餘の劇場に演ぜられたる傑作■

佐藤紅綠氏著　◉口繪　小金井橋畔の密語……名取春仙氏筆

小說　俠艶錄

子爵の令息と若き女俳優との間に結ばれたる火の如き戀も、「身分」の差といへる社會の約束に破ぶられ、血涙を飲んで遂に別離の嘆を叫ぶに至るの徑路、萬丈の波瀾あり變化あり。至情測測、滿紙皆涙痕。よし『不如歸』に泣かざるものあるも、本書を讀んで泣かざるは無けん。

「坂は照る〳〵鈴鹿は曇る、あひの土山雨がふる。」すゝり上げ上げて歌ふ馬子三吉の哀歌は、いかに重の井の胸に痛かりしぞ。彼女が演ぜるは傳說上の悲劇にあらずして彼女自身の悲劇なりき。夫が思ひ子を思ふ、假感直に實感となつて技神に入り、滿場の觀客壁を呑んで哭する時、彼女の胸は遂に裂けたり。櫻吹雪朧月夜の夢を亂して、小金井堤上一夜の情の、思へば惡緣なりしかな。蓋に最愛の子を奪ひ、更にまた、最愛の夫を奪はんとする無情の世よ。燈火のゆらぎ壁に淋しき時、泣いて別離を促して、紅涙雨の如し。一片の俠氣、毅然として義に就きたれども、脆き者よ汝の名は女也、悲哀、悲愁怨恨遂に身を破り、紅飛び綠亂れて彼女は遂に狂したり。あゝ俠にして艶なるわが坂東力枝の戀物語よ。

▼紅綠氏苦心の餘に成れる文情雙絕の傑作、哀切腸を斷たしむる戀物語也。

▼多感の士は乞ふ、艶にして俠なる我が女優力枝の悲慘なる運命に哭せよ。

大々好評
三版賣切
四版出來

特製頗美本
定價八拾五錢
郵送料金八錢

▼『俠艶錄』と同じく東西幾十の劇場に演ぜられ熱狂的

▼歡迎を受けたる紅綠氏最得意の作は卽ち本篇なり！

小說　潮（うしほ）

佐藤紅綠氏作

名取春仙氏畫

■大判特別美本
■定價金八拾錢
■郵送料金八錢

◀再版發賣▶

戀や、哀別や、歡會や、幾多曲折極りなきの構想を叙するに、暢達流るるが如き著者一流の彩筆を以てす。讀者必ずや人生運命の多岐に、無限の感慨禁ずること能はず、涙潸として襟を沾ほさん。

■世評一斑■

▼東京毎日新聞評　曾て脚本として全國幾百の劇場に演ぜられ、「俠艶錄」と相並んで新派の双璧と稱せられたる「潮」は、同じ作者佐藤紅綠氏の筆によりて、小說に書き改められたるもの也。山水明媚の境を背景とし、若き男女が熱烈なる戀愛を主題とし、哀別歡會の幾曲折に絡ふに、結んで解き難き世相の紛糾を以てす。劇としての變化は更に小說としての波瀾を加へて興味を二重にし、殊に其色彩に富める筆は、能く纏綿の趣を描いて一幅濃艶の活畫圖、青年子女の血を騷がさずんば止まざるの概あり。劇として舞臺に觀ざるの人も此一卷によりて、名優の技を髣髴せしめ得可し。興味を主とすれど、彼の低級の卑俗に媚ぶるを旨とせるの駄小說とは全く選を異にせるところ、近代の好著として推奬するに憚らず。

◉小說　雲の響（近刊）　佐藤紅綠氏作

■明治の文壇恐くは他に比を看ざる稀有の名文章

好色五人女

樽屋おせん
八百屋お七
お夏清十郎
おさん茂右衛門
おまん源五兵衛

眞山青果譯

井原西鶴作

■戀に生き戀に死せる多感の男女の運命に哭せよ

▼報知新聞評　井原西鶴の五人女は西鶴の作中の最傑作にして、而も西鶴の西鶴たる所以、西鶴の我が文藝史上の巨人たる所以は此五人女あるによる。五人女を除かば、西鶴はその價値の十が七を減ずべき也。然るに官憲此書の流布を禁じて我文藝史上の寶玉を亡ふ。青果氏の此の譯は此の渇を讀書界の爲めに癒さしめたり、且つその譯文の豐婉清秀よく原文の妙を傳へて抹するに新時代の色彩を以てす。西鶴が奇警の着眼と着筆と、青果氏の色彩多き筆致と相俟ちて、一讀して津液の生ずるを覺えず。

▼日本新聞評　五人女は西鶴傑作中の最傑作なるも、卑猥なりとの故を以て發賣を禁止せられ世人多く其絶妙の詞意を味ふこと能はず、青果氏之を憾み今時流の文に譯して公にせり。流石に文章に於て自然派中第一に推さるゝ人だけありて、文字を斡旋するの巧みなる事驚く可きものあり。簡勁にして豐艶なる西鶴の文、時樣の色彩を施されて妙味更に新たなるを覺ゆ。近來最も興味多き書として、之を讀書界に薦む。

▼特製、極美本、定價五拾八錢、郵税六錢、

獨歩書簡

冊評籍甚　九版又々賣切＊十版發賣

定價金六拾錢　郵税六錢

●文豪國木田獨歩の書簡數百通を收む

▲二六新聞曰く、其全部を通じて精神的な眞面目な熱力に充ちた調子は、深く人を動す。就中其戀人に送つた手紙には、獨歩氏の眞情流露して、再讀三讀するに足るものがある。書翰集として此位ゐ人を引き着けるものは少なからう。

▲大阪新報曰く、殊に獨歩が相愛の人信子に與へた書簡の數々は、當一句皆熱血である。熱涙である、「嗚呼わが信子よ。吾等一體は悲壯の歌を口吟して人生の大海を渡るのみ」と云ふが如きは、眞に一篇の哀詩である。裝釘も美しい。

●一面に於いて熱烈火の如き戀の書簡集なり

▲讀賣新聞曰く、獨歩が高潮の極に達したのは、明治二十八年佐々城信子との戀愛時代であつた。私は今迄にかくの如く熱烈の戀愛萬能主義の文字を見た事がない。二人の愛を成功するのは、人道の爲めだとまで叫んで居る。如何なる困難があらうとも二人の愛さへ變らなければ、滿足な生活が出來るものと眞に思つて居たのだ。

▲日本新聞曰く、殊に彼が生命を賭して戀へる佐々木某女に寄せたる數十通の書簡に至りては、痛絶人を泣かしむるものあり。

●活ける書簡文範を求むる人に之を薦む

獨歩小品

▼第三版出來——袖珍型美本——

赤裸々の感情を叙せるものあり、警拔の論議を行れるものあり。或は戀を描き或は運命を觀じ、天地の悠久なるを嘆じ、這生の不可解なるに哭す。短章小品と雖も、間々天才の閃きあり。讀んで限りなきの感興と大なる啓發とを受く可きもの。獨歩氏に憧るゝ人は乞ふ就いて愛誦せられよ。

定價參拾錢、郵税四錢——

□和譯法華經　田中智學氏序　山川智應氏譯（五版）▼定價壹圓參拾錢▼郵送料八錢

□和譯三部經　佐々木月樵氏閲　釋靈華氏譯（新刊）▼定價六拾錢▼郵送料六錢

□明治維新三大政治家　池邊吉太郎氏著（三版）▼定價七拾五錢▼郵送料八錢

□大久保利通　大久保利武氏閲　松原致遠氏編（新刊）▼定價五拾錢▼郵送料六錢

□黎明期の文學　相馬御風氏著（再版）▼定價八拾五錢▼郵送料八錢

□獨歩書簡　國木田治子編（十版）▼定價六拾錢▼郵送料六錢

□ワイルド死の勝利　上田長江氏譯（四版）▼定價壹圓四拾錢▼郵送料拾貳錢

□ドオデエ　サフオ　武林無想庵氏譯（再版）▼定價六拾五錢▼郵送料八錢

□オスカアワイルド　獄中記　本間久雄氏譯（四版）▼定價四拾五錢▼郵送料四錢

□露國新作家集　毒の園　昇曙夢氏譯（再版）▼定價九拾錢▼郵送料六錢

329
141

終